今井小だより

横浜市立今井小学校
令和４年８月３１日
学校だより　９月号

学校教育目標　：　か　が　や　い　て　い　る　子　　「自分大好き！今井大好き！」

夏休みを終えて

学校長　松永　史郎

37 日間の夏休みが終わり、学校に子どもたちの元気な声が戻ってきました。３年ぶりの「行動制限の無い夏休み」を各ご家庭ではいかがお過ごしでしたでしょうか。依然、感染拡大状況は高止まりで、誰がいつどこで感染するかわからない状況が続いており、まだまだコロナ禍前の夏休みとはかなり違ったものであったことでしょう。また、夏休み中に療養や自宅待機をせねばならなかった皆様には心よりお見舞い申し上げます。

とは言え、子どもたちにとって夏休みは特別なものであることは間違いありません。子どもたちが、何か一つでも、ふだんの課業期間にはできない経験を積むことができていれば幸いです。

私事になりますが、自分が小学生の頃の夏休みの思い出で忘れられないことがあります。小学校４年生の夏休み、私は父の郷里である長崎県長崎市に住む叔父（父の次兄）のところで一か月近くを過ごしました。その間、観光に連れて行ってもらったり、郊外のきれいな川や海で遊ばせてもらったりしてとても楽しい毎日を過ごしました。

でも、実は、長崎での夏休みを忘れることができないのは、そんな楽しい思い出のためだけではありません。滞在中に連れて行ってもらった長崎原爆資料館。そこで悲惨な写真や被害者の遺物などの展示を見て、私は強い衝撃を受けました。４年生の私が原爆についての予備知識のほとんど無い中で見た展示物の数々は、ただただ本当に恐ろしいもので、その日からしばらくは夜ひとりでトイレに行くことができなくなるほどでした。その得体の知れない怖さをどうにかしたかったのでしょう。横浜に戻ってから父から原爆投下当時の様子を聞いたことを今でも覚えています。（以下その内容です。）

昭和 20 年 8 月 9 日、父は小学校 5 年生の夏休み真っ最中で自宅におり、祖母は昼食の準備にとりかかろうとしていたところでした。11 時 2 分、突然の轟音・爆風と共に目の前が真っ暗に。家の近くに爆弾が落とされたのだと思い、外に出てみたところ、ガラスが割れたり建物の一部が壊れたりしてはいるものの、火災が発生しておらず、不思議な感じがしたそうです。当時の家は、大浦天主堂の近く、市の中心部から少し離れた高台にあったので、爆風だけで熱線の被害は免れたようです。（平野部の広島とは地形が異なり、周りを山に囲まれていた長崎の原爆被害は広島に比べれば限定的でした。）

夕方になり、工場での動員作業に行っていた中学生の兄二人がやっとの思いで帰宅し、どうやら新型の爆弾が落とされ、街の中心部は爆弾の被害と火災で大変なことになっているらしいということがわかりました。それを聞いた父は、街の中心部が見渡せるところまで行ってみたそうです。そこで、夕空の色に負けず真っ赤に燃えている長崎の街を目の当たりにしました。「あの光景を今でも忘れられない。」と言っています。

街の中心部に働きに出ていたご近所の方の多くが夜になっても帰って来ず、翌日、中学生の長兄が何人かで捜索に出かけ、悲惨な状況に打ちひしがれて帰ってきました。工場に散乱していた缶詰を持ち帰ったが、中が黒焦げでとても食べられる状態ではなかったそうです。また、父の同級生の中には、海水浴中に熱線を浴びて亡くなった友だちがいたこともわかり、次第に明らかになる被害の甚大さと得体の知れない新型爆弾の威力に、家族、ご近所の方たち皆で恐れおののいていたそうです。

原爆投下翌日に爆心地近くまで行方不明者の捜索に出かけた父の長兄（私の叔父）は、若くしてガンを患い亡くなりました。因果関係は明らかではありませんが、放射線被曝の影響かもしれないと父は言っています。その後も父が原爆や戦争のことを語るときに「今の日本の平和は戦争の被害の上に築かれたものであることを忘れてはいけない。」と繰り返し言っています。

さて、現在の日本を取り巻く状況は、コロナ禍に加えて、不安定な世界情勢の中で決して安穏ではなく、平和の大切さを子どもたちに伝える必要性はむしろ高まっていると言えるでしょう。平和について考える第一歩として、もちろん歴史を知ることも大切です。でも、それだけではなく、まず、子どもたちが自分事として、一番身近な友だちや周りの人たちを思いやり仲良く過ごせること、そのために相手の立場や気持ちを理解できるようになることが必要不可欠です。学校では、そのことをいつも心のどこかに留めおきながら様々な教育活動を進めてまいります。保護者の皆様には、引き続き、ご理解ご協力の程よろしくお願い申し上げます。